

それにはまことによい文章があるので、それを借って説明する。これは昭和二十八年一月三日の大阪読売新聞にのっていた文章である。

国 土 の 姿

小 泉 信 三

エブラハム・リンカーンに就いてこんな話が伝えられている。リンカーンが或る時、友人から推せんされた或る人物を採用しなかった。それは、彼の顔が気に入らないからだといった。それは酷ではないか。彼は自分の顔には責任はない。と友人はいった。リンカーンは応えて、イヤ、そうでない。人間四十以上になれば、自分の顔に責任がある。といったという。人の顔は、たしかに其人自身によって造られるものである。

森鷗外も、人間、生まれながらの顔を持って死ぬのは恥だ、といったという。リンカーンといい、鷗外といい、優れた人のいうところが期せずして一致するのである。

これは銘々の顔のことであるが、私は、吾々が祖先から伝えられたこの国土についても、それが言えると思う。顔が自分によって造られると同じように、国民の住む国土も亦、国民自身によって造られたもの、造られるものである。

吾々はこの日本の国土を祖先から受けて、子孫に伝える。鷗外が生まれたまゝの顔を持って死ぬのは恥だ。といったと同じように、この国土も、吾々が受け取ったまゝのものとして子孫に遣すのは、恥じなければならぬ。吾々はそれを前代から受け継いだよりも好いものとして、これを次代に引き渡さなくては済むまい。今は吾々が吾々の子孫に継がせる、この日本の国土のために、その全能力を傾けるべきではないか。

我国土は面積は狭く、完全なる食糧自給の望まれないことは、これは己むなきところであるが、なお食物生産の限界を拡げることは、たしかに余地がある。砂を変じて金たらしめることは不可能でも、開墾干拓により、農地の改良農業技術の進歩等により、近い将来に、一千万人若しくは一千数百万人分の食糧を増産することは、可能であるという。吾々が吾々の子孫に、今より多くの食物を産し得る土地を遣すことは、これは出来ることであるし、しなければならないことである。

茲に経済生活の羅列をするのは無趣味な業であるが、当面の実際問題を取り扱うに当たっても、たゞ目前の事にのみ心を奪われず、多少とも歴史の過去と未来とを顧望して、今の吾々の世代が、前世代から継承したものに、果して何物を付け加えたかを思うことは、常に忘れてはならないことである。

鷗外は、人間、生れたまの顔を持って死ぬのは恥だといったが、同じように、祖先から受け継いだ国土を、そのままで子孫に遣すことも恥すべきである。日々当面の葛藤の打開に忙殺されるその間にも、時々指針として、目標として国民に、如何によりよき国土を我が子孫に遣すべきかを思わしめることは、世の政治家の責務であろう。それによって国民の、この国土を愛する心は、抑え難く湧き起るであろう。

（若干原文を削除した）